

公衆衛生看護学における家庭訪問の教育方法に関する文献検討

A Review of the Literature on the Methods of Teaching How to Conduct Home Visits in Public Health Nursing

笹木 佳子 齋藤 公彦 長野 扶佐美

Yoshiko Sasaki Tomohiko Saito Fusami Nagano

要旨

本研究では、家庭訪問に関連した研究や報告から、家庭訪問における教育方法を明らかにすることにより、学内演習における教育方法の示唆を得ることを目的とした。国内で発表された文献のうち、医学中央雑誌 Web 版 (Ver.6) を用いて「家庭訪問」、「看護学生」をキーワードに検索を行い、文献 8 件が分析対象となった。文献に記述された教育方法に着目した結果、対象者との関係づくり、対象者の生活の理解、社会資源に関する教育方法が報告されていた。実際の訪問場面を想定したロールプレイやシミュレーションを活用した教育方法で、体験的に学べる機会の工夫が必要であること、学生が対象者の生活に結びつけることができる指導を行うこと、他領域で学んだ社会資源の内容を活かせるように、領域間をつなぐことができる指導を行う必要があることが明らかとなった。

Abstract

This study aimed to clarify the methods of teaching how to conduct home visits based on studies and reports related to the activity and to gain suggestions for on-campus practices. Of the literature published in Japan, the study narrowed down the search using the Web version of the Central Journal of Medicine (Ver. 6) with the keywords “home visits” and “nursing students.” As a result, eight articles were selected for analysis. The study focused on teaching methods mentioned in the articles and found reports on educational methods related to client relationship-building, understanding clients’ lives, and social resources.¹ The analysis elucidated the following as necessary elements: designing teaching methods that allow students to experience home visit situations through role-plays and simulations, providing instruction that enables students to connect with the lives of their clients, and offering guidance that helps students understand the relationships between various factors and apply their knowledge of social resources in different areas of study.

キーワード：公衆衛生看護学，家庭訪問，教育方法

Key Words : public health nursing, home visit, teaching methods

I. 緒言

保健師は、地域の人々の健康の保持・向上を目指し、家庭訪問、健康相談、健康診査、健康教育などさまざまな援助技術を活用して生活を支える専門職者である。

保健師は家庭訪問により生活の場に出向くことにより、個人・家族の反応や行動から現在の状態、今後予想される問題を考え判断して指導する¹⁾。

家庭訪問は対人支援のなかでも対象の生活の場に出向いて行う支援であり、対象の健康状態や人物像のアセスメントにくわえて生活空間・生活様式といった環境要因のアセスメントが可能になる。また、同居者に会える機会としても貴重であり、対象者と家族との関係性や家庭での役割を理解することも可能である²⁾。

実際の演習や実習において、表面に見える生活状況についての情報は得られるが、対象者の思いや、家族との関係性、社会資源の活用などの情報収集は、難しい。

厚生労働省の保健師教育の技術項目と卒業時の到達度は、「訪問・相談による支援を行う」の「個人/家族」を対象とした卒業時の到達度として、「一人で実施できる」レベルとしている³⁾。しかし、実際の実習現場においては、保健師と同行訪問のもと実施している。実習の到達度としては、公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム⁴⁾の「個人/家族の健康課題に応じた保健指導を実施できる」が「指導の下で実施できる」レベルの項目の方が実習現場に適している状況にある。そのため、卒業後、行政保健師として就職した際に、家庭訪問に際し、困惑することなくスムーズに実施できるためには、この到達目標を達成するような演習指導をすることが必要である。

そのため、実習前に家庭訪問技術の習得に向けて演習内容を検討し、より充実させていくことが求められている。

そこで、本研究は、家庭訪問に関連した研究や報告から、家庭訪問における教育方法を明らかにすることにより、学内演習における教育方法の示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 文献検索方法

2015年から2024年の間に国内で発表された文献のうち、医学中央雑誌 Web 版(Ver.6)を用いて「家庭訪問」and「看護学生」をキーワードに原著論文で検索を行った。検索の結果、28件の文献が抽出された。

これらの文献から、家庭訪問に絞られた教育方法の論文に焦点を当てた結果、文献8件を分析対象とした。

抽出された文献を精読し、著者（発表年）、目的、対象、方法、結果を整理した。整理した結果から、対象者との関係づくりに関する内容、対象者の生活の理解に関する内容、社会資源に関する記述を抽出し、まとめた。

2. 倫理的配慮

著作権を侵害しないこと、意味内容を損なわないように努めた。文献の出典がわかるように明記した。

III. 結果

対象文献の概要を表1に示した。対象となった文献は8件であった。8件の内訳は、研究対象者は7件が学生、1件は学生と地域住民であった。また、研究方法として、面接3件、グループインタビュー1件、記録から抽出した文献が4件であった。

1. 対象者との関係づくりに関する内容

本田⁵⁾は、1回目の家庭訪問では、学生は相手の家でどのように振舞ってよいのか、どのように話を切り出してよいのか戸惑っていたと報告している。細田⁶⁾は、関係構築の最初の段階である訪問の事前連絡や訪問時の

表1.文献の概要

番号	著者名 年	目的	対象	方法	結果
1	本田 2023	学生による継続的な家庭訪問を通して学生が得た学びと高齢者にとっての意義を明らかにする。	看護学部生2名 高齢者2名	面接	プロジェクトを通した学生の学びは、【コミュニケーションの能力形成に向けた試行錯誤】、【団地に暮らす高齢者の暮らしの理解】、【高齢者の価値観に触れる体験からの気づき】、【学生の手ごたえや達成感】、【2人ペアでのチームワークの醸成】の5つの項目で整理された。学生との交流で得た高齢者における意義は、【学生の訪問から、高齢者との交流では得られない未来志向性を得た】、【学生との交流は、私の”生きがい”を思い出させてくれた】、【次の時代を担う若者の成長に貢献する機会がもてて嬉しい】の3つのカテゴリーで説明された。看護学生による継続的な家庭訪問は、学生にとっては高齢者におけるウェルネスを学ぶことに有効であり、高齢者にとっては生きがい創出の機会になっていた。
2	細田 2022	学内家庭訪問実習が学生単家庭訪問の実施にどのように役立ったかを明らかにする。	看護学生9名	グループ インタビュー	学内実習で家庭訪問に必要な計測・観察技術を得し、情報収集方法や情報提供などの改善点に気づき、単家庭訪問に向けて改善することができた。学内実習で家庭訪問の特徴を理解して単家庭訪問を実践したことで、支援方法や家庭訪問の重要性の理解を深めていた。
3	若杉 2022	シュミレーションを活用した家庭訪問演習における学生の学びを、演習後および公衆衛生看護学実習後から評価する。	看護学生29名	振り返り用紙から抽出	家庭訪問演習でのシミュレーションを通しての学生同士の学び合いが気づきを増やし、学びの広がりと深まりをもたらしていた。また、家庭訪問計画作成段階の兄や母親の状態の観察の視点や、家庭訪問同行時の対象者および家族への姿勢・態度と声かけの視点や会話の進め方に活用していたことが明らかとなった。一方、「社会資源の視点の活用」は、「家庭訪問計画作成」、「実際の家庭訪問先」、「家庭訪問後のアセスメント・今後の計画のどの時点でも活用が低かったので、今後の課題である。
4	中島 2018	公衆衛生看護学実習の家庭訪問体験で、対象理解の過程において、保健師学生の「社会資源の活用」の捉え方を明らかにする。	看護学生7名	半構造化面接	訪問前は、対象者が利用しているサービスの内容や回数などの表面上の捉え方に留まっていたが、訪問時には、社会資源の活用状況をふまえて地域のエンパワーメントや開発の視点を捉えた。訪問後は、保健師は適切な時期に情報提供する必要性や、導入時の支援の重要性を認識し、対象者や家族にとっての活用の意味を考え、視野の拡大につながっていた。人々の暮らしを支える社会資源への認識を高めて、活用や開発の意義についてより理解を深めていけるよう教育方法を検討する必要がある。
5	平澤 2017	地域住民への継続した保健指導を目標とした家庭訪問における学びの内容を明らかにすることにより、継続訪問実習の課題を検討する。	看護学生53名	記録・評価表から抽出	実習前後に実習目標に沿った20項目の各項目について、「自信がある」「やや自信がある」「あまり自信がない」「自信がない」の4段階で評価を求め、点数化した。実習後は20項目すべての自己評価が高かった。また、【効果的な指導方法】や【適切な情報収集】【継続訪問の有効性】などの学びが抽出された。
6	藤田 2015	「家庭訪問実習」を履修している学生の実習総括記録の学びを分析し、今後の指導のあり方を検討する。	看護学生16名	記録から抽出	学生の学びとして、【対象理解のための情報収集・アセスメント】【看護計画の立案・実施および支援からの学び】【看護の継続性と家庭訪問の有効性の理解】【予防的視点を踏まえた知識獲得の必要性】【地域で支え、地域につなげる】【今後の課題】の6カテゴリーに分類できた。学生の困難感も学びへとつなげるためには学生自身が考えることが出来るように、カンファレンスなどの時間を利用した教員の関わりの必要性が示唆された。
7	森本 2015	地域看護学実習の家庭訪問で学生が修得する対象理解を明らかにし、看護実践能力の育成に向けた看護教育方法を検討することを目的とした。	看護学生18名	半構成的面接	家庭訪問における対象理解の修得として、【自分と周囲の関係性の違和感】【自発性をさえぎるプレッシャー】【体験から得られる手応え】【自分の認識を促す新発見】【ケアという認識の拡がり】【病院から地域につなぐ具体的な取り組み】【地域につなぐ取り組みの成果】の7つのカテゴリーが抽出された。対象者と関係構築が難しい状況で対象理解に努めていることから、実習環境の整備や授業づくり、領域間の指導をつなぐことが重要であると示唆された。
8	藤田 2015	家庭訪問を履修している学生の実習総括記録の学びの分析から、学生が感じる「困難感」を明らかにする。	看護学生16名	記録から抽出	学生が家庭訪問で感じている困難感は【コミュニケーションおよび情報収集の困難さ】【支援計画・実施・評価の困難さ】【知識・経験・情報不足等による困難さ】に分類できた。

最初の自己紹介をきちんとできるよう学内実習で経験しておくことが役立ったと述べている。

藤田⁷⁾は、家庭訪問において、学生は、コミュニケーションの困難さ、森本⁸⁾は病院等施設内で感じたことのない違和感に身を置いていると報告している。

また、若杉⁹⁾は、学生は対象者とのスムーズな会話の進め方を考えておく必要があると述べている。

2. 対象者の生活の理解に関する内容

藤田¹⁰⁾と平澤¹¹⁾は、学生の学びとして、対象の理解のカテゴリーを挙げている。また、藤田¹²⁾は、学生は、実際にその人が生活する場所へ赴き、自分の目で見て、話を聞いて、肌で感じることによって、家族、生活背景を含め対象を理解することの必要性について実感することができていたと述べている。

細田¹³⁾は、乳児家庭訪問演習では、正確な計測技術の習得、さらに、発達や股関節脱臼の確認、授乳や睡眠など生活状況の確認を各自で作成したチェックリストを用いて学内演習を行うことが対象理解につながったと述べている。

3. 社会資源に関する内容

藤田¹⁴⁾は、学生の学びとして、社会資源の活用のカテゴリーを挙げている。中島¹⁵⁾は、学生は、保健師は必要に応じて社会資源の情報が対象者や家族に提供できるように情報を把握しておくことの重要性に気づいたと述べている。また、学生は、他領域で学んだ社会資源について考えるなど、他領域での実習が影響を及ぼしていた¹⁶⁾と述べている。

IV. 考察

1. 対象者との関係づくりに関する内容

分析結果より、体験的に学べる機会の工夫

が必要であることが明らかとなった。

学生は家庭訪問時に初めて対象者と会うことが多い。家庭訪問で対象者に受け入れてもらうために、訪問準備として対象者に連絡することや訪問当日に訪問者の自己紹介と訪問目的をわかりやすく説明することも重要である¹⁷⁾。

そのため、日頃から活発なディスカッションを演習で取り入れ、コミュニケーションを高めることが必要であると考えられる。

また、実際の訪問場面を想定したロールプレイを活用した教育方法に意義があると考えられ、教員の役割として、ロールプレイを行う際には、グループ全員が家庭訪問を行う当事者として考えながら参加できるような工夫や働きかけをしていく¹⁸⁾。シミュレーションを活用した家庭訪問演習では、学生の具体的な気づきを促す教員の働きかけの方法の工夫などが課題である¹⁹⁾。

村上²⁰⁾は、出産育児を有する卒業生に模擬患者を依頼し、新生児・乳児家庭訪問の効果を高めることができたと報告している。

したがって、実際の訪問場面を想定したロールプレイやシミュレーションを活用した教育方法で、体験的に学べる機会の工夫が必要であると考えられる。

2. 対象者の生活の理解に関する内容

分析結果より、家庭訪問をすることで、対象者の生活が理解できたことが明らかとなった。

吾郷²¹⁾は、地域への家庭訪問により、対象者が生活する場所で学習しないと、退院後の生活場面を想定してアセスメントすることは難しいため、看護学生が地域の中で生活者を捉える機会を早期に設定することは対象理解の幅を広げる意義があると述べている。

したがって、生活を理解をするためには、演習等で、学生が対象者の生活に結びつける

ことができるように、学生が多様な人々との交流の機会を多く持てるような体験を行うことが必要であると考えられる。

3. 社会資源に関する内容

分析結果より、社会資源への認識を高める教育方法の検討をすることの必要性が明らかとなった。

中島²²⁾は、社会資源を把握しておく必要があり、どうしたら活用できるのか把握しておくことが重要であると述べている。

保健師は、地域診断を通じて地域で活用できる社会資源について詳細に把握していることが重要である²³⁾。

細田²⁴⁾は、学内実習で、社会資源に関する理解の不足を感じたため、訪問前に社会資源の一つである支援施設の見学をしたり、市町村役場からの通知等を見たりして、具体的な情報提供ができるよう準備し、対象者に分かりやすく情報提供を行う必要性を述べている。

したがって、社会資源への認識を高めるためには、演習で地域診断を行うことで、地域の社会資源を把握すること、また、他領域で学んだ社会資源の内容を活かせるように、領域間をつなぐことができる指導を行う必要があることが考えられる。

V. 結語

1. 実際の訪問場面を想定したロールプレイやシミュレーションを活用した教育方法で、体験的に学べる機会の工夫が必要である。

2. 学生が対象者の生活に結びつけることができる指導を行うこと、また家庭訪問を体験することも必要である。

3. 地域診断を行うことで地域の社会資源を把握すること、また、他領域で学んだ社会資源の内容を活かせるように、領域間をつなぐことができる指導を行う必要がある。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 1) 岸恵美子, 平野かよ子, 村嶋幸代(2023), 保健学講座 2 公衆衛生看護支援技術, メヂカルフレンド社, 東京, 40.
- 2) 岸恵美子, 平野かよ子, 村嶋幸代(2023), 前掲書 1), 101.
- 3) 厚生労働省, 保健師教育の技術項目と卒業時の到達度, <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0428-8m.pdf>, (2024.10.16).
- 4) 全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会, 公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム, <https://www.Zenhokyo.jp/work/doc/core-curriculum-2017-houkoku-3.pdf>, (2024.10.16).
- 5) 本田光, 山田信博, 林匡宏, 藪谷裕介, 中田亜由美(2023), 継続的家庭訪問による学生の学びと高齢者の生きがい創出—UR あけぼの団地で実施された「教えて人生の先輩」プロジェクトの評価—, 札幌市立大学研究論文集, 17(1), 3-13.
- 6) 細田裕子, 遠山清香, 松尾由貴子, 細田せい子, (2022), 学内家庭訪問実習が学生単独家庭訪問へ及ぼす効果, 飯田女子短期大学紀要, 39, 103-124.
- 7) 藤田彩見, 金山時恵, 矢庭さゆり(2015), A 大学看護学生が家庭訪問実習で感じる困難と今後の実習指導のあり方, 新見公立大学紀要, 36, 119-123.
- 8) 森本千代子, 眞崎直子(2015), 家庭訪問における対象理解の修得に向けた看護教育方法の検討, 日本赤十字広島大学紀要, 15, 77-86.
- 9) 若杉里実, 浅野いずみ, 二村純子(2022), シミュレーションを活用した家庭訪問演習での学生の学びの評価, 日本看護学教育学会誌, 31(3), 61-70.
- 10) 藤田彩見, 金山時恵, 矢庭さゆり, (2015), A 大学看護学生の家庭訪問実習からの学びと今後の指導のあり方, インターナショナル Nursing Care Reseach, 14(2), 79-88.
- 11) 平澤則子, 飯吉令枝, 井上智代, 藤川あや, 片平伸子, 高林知佳子(2017), 公衆衛生看護学実習にお

ける学生の継続訪問実習の学び, 日本地域看護学会誌, 20(2), 73-79.

12) 藤田彩見, 金山時恵, 矢庭さゆり, 前掲書 10), 79-88.

13) 細田裕子, 遠山清香, 松尾由貴子, 細田せい子, 前掲書 6), 103-124.

14) 藤田彩見, 金山時恵, 矢庭さゆり, 前掲書 10), 79-88.

15) 中島富志子, 市原千里, 永井健太, 平塚久美子, 照沼正子(2018), 保健師学生の家庭訪問体験における対象理解に関する研究～社会資源の活用に関わる分析～, 東都医療大学紀要, 8(1), 31-39.

16) 中島富志子, 市原千里, 永井健太, 平塚久美子, 照沼正子, 前掲書 15), 31-39.

17) 井伊久美子, 勝又浜子, 森永裕美子, 荒木田美香子, 坂本真理子, 村嶋幸代, 新版保健師業務要覧第4版, 日本看護協会出版会, 東京, 198.

18) 細田裕子, 遠山清香, 松尾由貴子, 細田せい子, 前掲書 6), 103-124.

19) 若杉里実, 浅野いずみ, 二村純子, 前掲書 9), 61-70.

20) 村上真理, 福島紗世, 小澤未緒, 船田友木, 藤原友紀, 藤本紗緒里, 大平光子(2017), 看護基礎教育における新生児/乳児家庭訪問演習に模擬患者を活用することで学生が獲得する能力, 日本母性看護学会誌, 17(1), 105-111.

21) 吾郷ゆかり, 吉川洋子, 松本玄智江(2009), 看護基礎教育における「生活者を理解する視点」—家庭訪問実習と病院実習後の自己評価より—, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 3, 77-83.

22) 中島富志子, 市原千里, 永井健太, 平塚久美子, 照沼正子, 前掲書 15), 31-39.

23) 上野昌江, 和泉京子(2021), 公衆衛生看護学 第3版, 中央法規, 東京, 240.

24) 細田裕子, 遠山清香, 松尾由貴子, 細田せい子, 前掲書 6), 103-124.